

ミホススミに光を！プロジェクトの意義と成果

岡 本 雅 享*

1. 日本海交流と謎の神？

20世紀末、日本海文化論が興隆した。富山市が1981年に「日本海文化を考えるシンポジウム」と「越と出雲の交流」を開き、86年に日本海文化研究所を設置したのは、その先駆けといえる。1988年には、新潟県糸魚川市で行われたシンポジウムの特別講演「越と出雲」で、門脇禎二・京都府立大学学長（当時）が『古事記』や『日本書紀』と異なる『出雲国風土記』に、日本海文化を考える大きな手がかりがあると説いた（『古代翡翠道の謎』）。その出雲＝島根県松江市でも「日本海沿岸地域の文化交流と地域振興」を目指した学術交流を、1986年から始めている（『島根県の環日本海交流』）。

1990年代に入ると、冷戦の終結とポスト冷戦時代の始まりを受けて、冷戦下で「閉ざされた海」と見られていた日本海（東海）を囲む諸国の交流や（経済）協力への期待が一気に高まった。1996年には日本、韓国、中国、ロシアの北東アジア地域4カ国の29広域自治体の首長が集まってNEAR（北東アジア地域自治体連合）を創設し、長らく「裏日本」と呼ばれてきた日本海沿岸の道府県が積極的に加わった。地方分

権化などの流れにのり、従来、周縁・辺境とされてきた環日本海沿岸諸地域が協力し合うことで、地域の活性化を図ろうという試みである。

その当時、盛んに唱えられた「日本海交流」論や「環日本海経済圏」構想は、21世紀以降の東アジア諸国間関係の変化の中で、低調にはなっている。だが、途絶えたわけではなく、人々の意識に、しっかり根付いた感もある。その一つの表れが、出雲と高志（古志・越）の海を介した交流に、光を当てる試みだ。2018年末、新潟総合テレビが開局50周年記念特番として「越後と出雲」を制作し、新潟県のほか、島根・鳥取両県で放映された。2020年末には、その第三弾「悠かなる越の国へ」も制作されている（2021年1月放送）。

かつて今の北陸から下越にわたる広大なコシ（高志・古志・越）の国があった。ヤマト政権がその力を削ぐため越前・加賀・能登・越中・佐渡・越後と6つの国に分割したほど大きな国（のまとまり）である。

その広大なコシを、一つの国としてみる世界観を今に語り継ぐのが、733年成立の『出雲国風土記』だ。同風土記には固有の創世神話「国引き」がある。巨神オミズヌの神が、出雲大社

* 福岡県立大学人間社会学部・教授

図1 オミツヌノミコト国引き後の図



注：渡辺彝（つね）著「出雲稽古知今図説」（江戸時代の天保年間成立）の中の臣津野命国引訖而後之図（島根県立図書館所蔵・提供）左下の「美穂之崎」の部分に「此山能登国都都の三崎より来り」とある。

の鎮座する杵築の岬（島根半島西部）を新羅（朝鮮半島東部）の岬から、三穂の埼（美保関、同半島東部）を高志のツツの岬（能登半島の北端、珠洲岬）から引寄せ、島根半島を創造したという壮大な神語りだ。その美保郷の条に、天の下造らしし大神（オオナムチ）＝出雲大神が高志の国の女神ヌナカワヒメと結ばれて生まれた神、ミホススミ（御穂須々美）が鎮座する地だから美保という、とある（図1）。

『出雲国風土記』には、神門郡古志郷の条で、古志の国の人たちが来て堤防をつくり、住み着いた所なので古志という、など度々コシが登場する（表記は古い順に高志→古志→越へ変わったとされる）。ならば、そのコシ（福井・石川・富山・新潟県）の中の出雲（金沢市出雲町や新潟県出雲崎町など古くからある出雲地名）も、出雲から人々が移り住んだ地ではないか。コシには出雲神を祭る古い神社が随所にあり、山陰系土器など、出雲から人が移住し、或いは文化が伝播した形跡も数多く見つかっている。山陰特有の四隅突出型墳丘墓が北陸で発見され、か

つその中間では見られない。このヒトデ形の墳墓は陸を介さず、海路で直接伝播した墳墓として注目を集め、日本海文化論の象徴の一つとなった。

日本列島の歴史を振り返れば、長きにわたり、人を結んできた交通の大動脈は海の道で、岬こそが、他国と行き交う人々が辿り着き、旅立つフロンティア（最前線）だった。国引き神話の基点である出雲国の美保関と高志（越）国の

珠洲岬に鎮座してきたミホススミは、出雲と高志の海路による往来と交流が生み出した、両国の縁を象徴する海の女神である。

この「国際結婚」で生まれたミホススミを祭る神社は、出雲を起点として能登から越後へ、さらに信濃＝千曲川沿いに南下して北関東（武蔵）まで至っており、日本列島における文化伝播の一つのルートを教えてもくれる。『古事記』研究の大家である三浦佑之・千葉大学名誉教授も「日本海をつなぐ神……ミホススミこそが、古代の日本海文化の謎を解き明かす鍵を握る神」だと注目する所以だ（『古事記・再発見—神話に隠された神々の痕跡』）。

ところが昨今、その女神の姿がかすんで、多くの人の目には見えにくい存在になってきた。ミホススミに言及する本やインターネットのブログをみると、「謎に満ちた神」「よく分からない神」「姿を消しつつある神」「非常に影が薄い神」「忘れ去られた姫神」「男神か女神かも分からない」「不遇の神」といったワードが散見される。そうした言説が飛び交っているためでも

図2 正体不明の神？ ミホススミ



注：美保関地域観光振興協議会のクリアファイル「神々のいるまち美保関」（部分）

あろう。美保関出身の漫画家・亜月亮さんが描いた美保関ゆかりの神々のイラストの中で、ミホススミは姿形の見えない、正体不明の神となっている（図2）。

その一因は、日本の近現代、太平洋ベルト地帯を主軸とする陸上主体の交通体系が作られる中、日本海沿岸域が「裏日本」などと呼ばれ、また岬は陸路では最果て、僻地と映るようになったことにあると思われる。また、ミホススミの生命力が出雲—越前—能登—越中—越後—信濃—上野—武蔵にわたる「国際」的つながりの中にあつたが故に、近代以降、列島の諸地域が（一つの）中央—（多数の）地方に一元化され、地域と地域が分断される中で、輝きが弱まり、見えにくい存在になったとも考えられる。

さらに『古事記』と『日本書紀』を合わせた「記紀神話」が唯一の、統合された「日本神話」と位置付けられた近代国家体制の中で、出雲（国風土記）神話固有の神ミホススミには、光が当てられなくなったことも、影響していよう。本来ミホススミを祭っていたとみられる美保神社と須須神社の主祭神は、現在いずれも大和神だ。それは、大和に一元化された日本史観と結びついた社会現象ともみられる。

加えて近年は、ミホススミは諏訪神^{すわのかみ}タケミナカタの幼名（別名）だという、特定の地域に見られた言説がインターネットで拡散し、古来こ

の女神を祭ってきた地域のネット世代にも浸透してきている。この説が広がれば、ミホススミという固有の神などいなかったことになってしまう。日本海沿岸の各地を結ぶように祭られてきた女神の姿がかすみ、「男神か女神かわか

らない」と受け取る人たちが増えてきた所以であろう。それでは出雲と高志の間に本来あったムスビの記憶（証）が消えてしまう。

そうした中、筆者は有志と共に、出雲と高志（越）の、忘れられかけた縁を思い起こし、結び直す鍵となるミホススミに光を当てるべく「ミホススミに光を！プロジェクト」を呼びかけ、立ち上げた。そして2021年4月から毎月1回、島根、石川、富山、新潟、長野、東京、福岡をズームでつなぎ、1年間にわたり、学習会と交流会を重ねた。これらの地域と人々を結び、散在している各地の情報や伝承などをつなぎ合わせていくと、ミホススミは再び光を取り戻していった。ミホススミの実像が、忘れられかけていた地域間の繋がりとともに、浮かび上がってきたのである。

2. 各地におけるミホススミの祭り

(1) 二つの岬に鎮座する産土神

ミホススミがどんな神かを考える起点となるのは、やはり『出雲国風土記』だ。巨神オミズヌが海の彼方から陸塊を引き寄せたという国引き神話は、新羅国や高志国との海を介した交流・往来をベースに成り立っている。その国引きで、高志のツツの岬から引き寄せた三穂の埼＝島根郡美保郷に鎮座するのが、出雲の大神と高志の

女神の間に生まれたミホススミだ。

この神が水神の流れを強く受け継ぐことも、同風土記の記述から分かる。母神ヌ(玉)ナ(の)カワ(川)ヒメは川の女神であり、またオキ(沖)ツクシイ=海の沖の神、ヘ(辺)ツクシイ=海辺の神の子として、沖一岸一川、すなわち海から内陸へ至る水神の系譜を表している。父神の出雲大神も、能登以東では海を渡り来る寄神、すなわち海洋神としての性格が強い。このようにミホススミは海神を先祖にもち、海を介した交流の中で生まれた神なのだ。

風土記はまた、ミホススミの鎮座地ゆえに「美保」の地名がついたとする島根郡に、^{じんぎ}神祇官社「美保社」を記す。ならば、同社の祭神はミホススミだったとみるのが自然だろう。また当時の「美保浜」の様子を「美保浜 広さ一百六十歩、西に神の社あり、北に^{おのみたから}百姓の家あり、志毘魚(まぐろ)を捕る」とも伝えている。美保浜(湾)を囲んで北側に民家が並び、その西の一角に美保社が鎮座している光景が、目に浮かぶ。そして古代の美保社が、海辺にたつ海民・漁撈民の産土神だったことも見て取れる。

その約2世紀後に出された^{えんぎしきじんみょうちよう}「延喜式神名帳」(926年)の出雲国島根郷には「美保神社」が載っている。これが前記風土記の「美保社」だという点も通説になっている(加藤義成『出雲国風土記参究』、荻原千鶴『出雲国風土記』全訳注ほか)。ところが今の美保神社の主祭神は、^み三^{ほつひめ}穂津姫命と^{ことしろぬし}事代主神。いずれも大和神話の国譲り譚に(ただし別々に)登場する二神だ。

その経緯について『美保関町誌』は、こう記す。「美保社の祭神は、風土記の記すごとく、初めは御穂須須美命であったと考えられる。しかし現在は、事代主命と美穂津姫命の二神を祀っている。これは『古事記』の国譲り神話の

図3 美保関の観光案内に描かれたミホススミ



注：美保関地域観光振興協議会「関詣り」より

中に、事代主命が^{みお}御大の御埼で鳥の遊び、^{すな}魚取りをしておられることが見え、また『日本書紀』に、国譲りの後、^{たかみむすび}高皇産靈神の^{みこ}御女、美穂津姫命を大国主命の妃神とされたことが見えているから、『記紀』の国譲り神話に基づいて、祭神の変更がなされたものと思われる」と。

いっぽうミホススミは、いつの頃からか、美保湾の東部に鎮座する地主社で祭られるようになった。この地主社に対する地域の人々の思いは、地元制作の観光案内などにも表れている。例えば、美保関地域観光振興協議会作成のパンフ「関詣り」は「美保の七福神」との一つとして「御穂須須美命/地主社」を挙げ、「美保関の祖神で氏神様」と記している。描かれた「御穂須須美命(ミホススミノミコト)/地主社」は、若い女神だ(図3)。

ミホススミは国引き神話が語る「高志のツツ

図4 珠洲岬海上から望む須須ヶ嶽



注：ランプの宿提供

の岬」とされる、能登半島最北部の珠洲岬でも祭られてきた。そして「延喜式神名帳」は当地＝能登国珠洲郡に須須神社の名を挙げている。美保社と同社の名を並べてみると、ミホスミの神霊を、出雲と高志を結ぶ航路の突端—二つの岬に建つ「美保の社」と「須須の社」に分けて、鎮めたように思われる。ところが現在、珠洲市三崎町寺家にある須須神社の主祭神は、すすの瓊瓊杵尊ににぎのみことと木花咲耶姫命このはなさくやひめだ。大和神話の天孫降臨譚の主演と、その妻の夫婦神である。これに対し『珠洲市史』『式内社調査報告』『日本の神々』など諸文献は、古来ミホスミを主祭神として祭ってきた珠洲市狼煙町の山伏山の山頂に鎮座する須須神社奥宮を「延喜式神名帳」掲載の須須神社とみている。

主祭神が異なり、寺家（旧村）と狼煙（旧村）は昔から別々の集落であるなど、両社は実際上、本社と奥宮の関係にはない。寺家の社は、もともと『三代実録』の貞観15（873）年8月4日の条に出てくる高倉彦神社だったとみられている。同社が初めて須須神社の名を使ったとされる「式内等旧社記」（承応2＝1653年書写）で、寺家村の高倉宮（祭神・高倉彦神）が式内社・須須神社で、狼煙村山伏山（須須ヶ嶽）の鈴奥大明神が、その奥宮（鈴嶽奥神社）としたのである。その後、祭神が現在の二神に代わった。

橋本秀一郎「須須神社の成立についての諸問題」（『珠洲市史・第六巻』）は「延喜式神名帳」に載る須須神社は「海上交通を守護する須須ノ神を祀る社として成立した」と述べている。『日本の神々』も第8巻中の「須須神社」で、能登半島の先端部にあつて、

海上交通の絶好の目標となる須須ヶ嶽（山伏山）は、古くから海上守護神が鎮まる山として、日本海を航行する海人たちの「地域を超えた崇敬の対象」であったという。須須ヶ嶽は標高172m、能登半島の先端部・珠洲岬にあつて、ドーム状にそそり立つ秀麗な山だ。海上からその山容を望めば、「絶好の目標」という言葉に頷けるだろう（図4）。

いっぽう珠洲郷土史研究会の創設者・和嶋俊二さんは『奥能登の研究』で「延喜式内の須須神社の祭神は元来、美穂須須見命」だとしつつ、海の彼方との交流によって生きてきた奥能登の民衆の間には「幸をもたらず神は人間界に常在せず、時を定めて去来して祭をうける」との信仰が受け継がれているという。須須の神＝ミホスミは、美保関と珠洲岬の双方に拠点があつて、出雲と能登を結ぶ海を往来している神と映ってきたのだろう。

(2) 越前・越中のミホスミと鎌倉期の木像

越前国坂井郡の式内社・大湊神社おおみなと（福井県坂井市三国町）に、鎌倉期のミホスミ木像が伝わる。三国港の北東に連なる岩礁海岸が、日本海に突き出た安島岬あんとうの沖合に浮かぶ雄島おしまに鎮座する古社だ。日本海沿岸の海運における重要拠点・三国湊にも近い雄島は、周囲2 kmほどの

図5 美穂須々美神と伝わる鎌倉期の女神木像



注：大湊神社（福井県坂井市三国町）所蔵・提供、福井県指定文化財

小さな島だが、昔から「神の島」として崇められ、海上守護神として、海運関係者たちが厚く信仰してきた。

貞享2（1685）年の『越前地理指南』に「三保大明神」の神額を掲げていたとあるように、大湊神社は中世から近世にかけて「三保大明神」と呼ばれていた。同社は現在、その三保大明神に事代主神・少彦名神すくなひこなを当てており、三穂須々美神は、天正年間（1573-1585）に社殿が大破したため合祀した式内社やなきせの・楊瀬神社の祭神として、相殿で祭っている。ただし安政4（1857）年の岡野吉孝『越前国官社考』には「大湊神社 此御社は安島浦の海中雄島に鎮座、三保大明神と称す是なり。祭神三穂須々美命」ともいう。いずれにせよ、美保神社やミホススミとの縁が深い神社である。そして、この神社の宝物として受け継がれてきたのが「女神像一軀（美穂須々美神）（鎌倉時代）」（『大湊神社縁起』）だ（図5）。松村典尚宮司に尋ねると、代々ミホススミ神として伝わってきた女神像（高さ58cm）だという。

2020年8月、この木像が福井県指定文化財となった際、同県生涯学習・文化財課が作成した資料には、以下の「由来・特徴」が書かれてる。「背筋を伸ばして、わずかに上を向いて坐す姿は端整であり、はっきりと目を開いて、口を僅かに開けて上歯を見せ、何かを語りかけるかの表情は、若々しく気品と生気が宿っている。着衣では、小桂こうちぎと思われる衣を肩から肘上まで降ろして着する」と。小桂は平安時代以降、高位の成人女性が準正装として纏った上着だ。これらの記述から、当時（鎌倉期）の人々が、端整で若々しく、気品と生気が宿っている高位の成人女性を、ミホススミに重ね合わせていたことが窺える。

美保関と珠洲岬の海辺に鎮座し、海神・水神の系譜をもつミホススミは、基本的には航海安全・豊漁の神である。志賀剛『式内社の研究』（第4巻）も、美保神社の項で「元来、地主神のミホススミは漁業と航海の神であった」と述べている。越前の大湊神社もそうであるし、能登半島内浦の越中（富山県）氷見にある須須能神社（祭神ミホススミ）も、天保9（1838）年、不漁のため漁村の住民が談合し、能登の三崎権現（須須神）へ祈祷に出向き、勧請した社だ。

参拝した人々が帰船の日から、サバ、イワシ、アジ、イカなどが大漁となり、町が大いに繁栄したので、沖合の唐島に能登の三崎権現を勧請し、祭礼を行ったとある（『応響雑記』）。近世創建の比較的新しい社だが、須須神が船乗りたちから豊漁の神として信仰されていた証だ。そのミホススミが越後から内陸に入り、信濃へ至ると、河川や用水を司る水神、さらには稲の豊穰の神へ（北信）と性格が変化する。

(3) 河川灌漑・稲作豊穰の神として祭られる信濃のミホスミ

信濃国旧埴科郡（現長野県千曲市）では、古くから出雲大神を祭る須須岐水神社と御子神の御穂須須美神社が、この地域一帯の灌漑用水を守る神として鎮座してきた。あたかも一対のように須須の名をもつ二つの社から「須須」の意味も見えてくる。

明治期の『大日本地名辞書』は「珠洲郡は和名抄に須須と注し、岬角の名を旧来須々と云ひ、郡名之に因る」と記す。平凡社『石川県の地名』は「ススは岬を意味する」という。さらに『出雲国風土記』の、美保と同じ島根郡の中に、須須比埼の記載がある。『出雲風土記鈔』（1683年）が「大芦浦の須々美なり」という、この須須比埼は、『島根地質百選』にも載る須々海海岸とされている。同風土記には、出雲郡に須々比池の名も載っている。

こうした地名や神名から、須須は海岸や湖畔、総じて水辺にかかわる言葉だということが見えてくるのだ。実際、須々岐水神社は近世、屋代村を含む18カ村、12000石の水田地帯を灌漑する屋代用水堰の守護神だった。須須岐水神は川岸の分岐点に鎮座する水の神、水路の分岐を守り司る神と読みとれる。

いっぽう同社に近い一重山の北端部に鎮座してきたのが御穂須須美神社である（明治41年7月、須須岐水神社に合祀）。一重山は上空から見ると蟹の爪のように見え、その細長い地形は美保関をも思わせる。白石昭臣編『島根県の地名辞典』は、美保のミ（美・御）は神聖を表す語で、ホ（保・穂）は先端・突端を意味し、神霊の寄りつく所だとする。同神は出雲や能登と同様、ここでも岬（一重山）の突端に鎮座していたのだ。

明治12年『信濃国埴科郡郡神社明細帳（稿）』に、こうある。中古、千曲川の川添が干潟となり、開墾して今の地へ、人々が移住する際、白鳳2年創建の祝の神社を、今の須々岐水神社の地へ遷座し、旧社域に御子神・御穂須々美命が鎮座した。貞観年間（859～76）にしばしば洪水が起り、人民が困苦した折、須々岐水神社の大国主神のご加護で里民が救われたという。

当地には、今も屋代田んぼと呼ばれる肥沃な田園地帯があり、平安時代の埋没条里水田も確認されている。この旧条里地帯を灌漑する用水は、千曲川を10km余り遡った南方の坂城で取水され、千曲川の旧流路を利用した水路で屋代田んぼに達する。それを配分する分岐点で、須須岐水神社と御穂須須美神社が鎮座する一重山突端の間にあった。出雲大神とその娘神が、屋代条里の用水を守り、水難を防ぐ水神として、屋代用水の始点を両側から挟み、守るように鎮座していたことが分かる。

上田市の山家神社と御穂須々美神社も、父神＝出雲大神の仕事を、娘神＝ミスミが補佐するように鎮座している。信濃国小県郡の式内・山家神社（真田町）の祭神は、大己貴神（出雲大神）である。霊山信仰の四阿山から流れ出す神川（千曲川の支流）は山家郷の水源で、その上流域の左岸に鎮座する同社は、水分の神（水の分配を司る、灌漑治水の神）として崇敬されてきた。いっぽう古くから林之郷の産土神だった御穂須々美神社は、その山家神社から神川沿いの10kmほど下流に鎮座し、林之郷の河川の灌漑と豊穰を祈る神となっている（図6）。神川の上流で父神が差配する灌漑用水が、下流で無事に行きわたるよう、娘神が見守るかのごとく、鎮座しているのだ。

このように、国作りの神（出雲大神）を父神、

図6 長野県上田市の御穂須々美神社



注：甲田圭吾宮司提供

河川の神（越の奴奈川姫）を母神とするミホススミ神が、信濃では河川の灌漑で豊穡をもたらし、父神の国作りを補佐する神となったのである。その場合のミホススミは、ミホ（美しい稲穂）＋ススミ（「進む」の名詞化）＝「美しい稲穂の実りを進める神」と解釈されたのだろう。ミホススミを主祭神とする長野県中野市越の越智神社の場合も、隣集落、赤岩に大国主神（出雲大神）を祭る式内論社・高杜神社が鎮座している。信濃では、このようにミホススミが父神・出雲大神と共に、或いは近くで祭られているケースが顕著にみられる。

以上、『出雲国風土記』をはじめとする基本史料や、各地におけるミホススミの祭りの状況を見てきた。以下、それらをつなぎ合わせて見えてくるミホススミ像を、各地の伝承にも目を向けながら、描き出してみたい。

3. ミホススミ神名考

神名には意味や由来がある。ミホススミの場合「ミホ（美保・御穂）スス（須須＝珠洲）ミ（美＝女性）」と捉えるのが、素直でふさわ

しいと思う。前掲『島根県の地名辞典』は、ミホ（美保・御穂）のミ（美・御）は神聖を表す語で、ホ（保・穂）は先端、突端を意味し、神霊の寄りつく所だとする。いっぽうスス（須須＝珠洲）も、海岸部や岬と縁の深い語であることは前述のとおりだ。

また末尾のミ（美）は、女神を表す接尾語とみられる。ミホススミは、他の多くの女神のように「～ヒメ」という神名ではない。それが前述した男神説を一定広めてきた要因ともみられるが、『古事記』に登場する女神の中にもアマテラスやクラオカミなど「～ヒメ」がつかない女神たちはいる。分かりやすいのが、『古事記』の創世神話に登場する夫婦神、伊邪那岐と伊邪那美だ。両神の神名は

イザナ（誘）ナ（助詞）キ（男性）＝「誘う男」神

イザナ（誘）ナ（助詞）ミ（女性）＝「誘う女」神

を意味するというのが通説である（大野晋編『古典基礎語辞典』）。キ（岐）とミ（美）が男女を分ける接尾語になっているのだ。もっとも、筆者がそのように考える基本的な理由は、ミホススミが出雲から越前、能登にわたる日本海沿岸で、地元の人々から女神として敬われてきたことにある。出雲と越前の例は前述したが、能登でも『珠洲市史』が、ミホススミ神は「能登を含む越と出雲を結ぶ神格」で「より広域の海上交通」「異なった政治圏の接渉」における「汎い人格神」としての「海の女神」だと記している（第6巻2章2節1項）。2020年末のロケで筆者が珠洲を訪れた際、お世話になった須須神社奥宮氏子総代の寺井一也さんから、生まれた娘にヒメ神のご加護があるようにと、美穂と名づけたというお話もうかがった。

専門家の言説も、一般にそれを前提としてきた。例えば、地元・出雲学研究所の藤岡大拙理事長（島根県立大学短期大学部名誉教授）は『出雲学への軌跡』で、こう述べている。「古事記神話は……史実の反映を思わせる内容も含んでいる。……八千矛神（オホクニヌシ）は高志（北陸地方）の沼河比売ぬなかわひめに求婚しようと出かけていき、首尾よく結婚する。『出雲国風土記』によれば、このとき御徳須須美命という娘神むすめをもうけている」と。

また出雲古代史研究の大家、瀧音能之・駒澤大学教授（日本古代史）も『出雲の謎大全』の「ミホススミ神—美保の女神の神話は何を物語るか」で、こう述べている。「美保神社の祭神は現在、コトシロヌシ神とミホツヒメ神の二神である。しかし、そもそもはミホススミ神という女神であったと考えられる」（美保の女神の実像）と。

以上のような単語の解析や実情からすると、ミホススミは、ミホとススという同義語を重ねた神名で「神霊が宿る岬の女神」を意味すると捉えられる。

いっぽうミホススミは、出雲のミホと高志のススという二つの地名を並べた神名とも解釈できる。荻原千鶴・お茶の水女子大学名誉教授は『出雲国風土記（全訳注）』で、同風土記では地名と神々の結びつきが強いが、事実は「郷名由来譚とは逆で、地名が先にあって、地名に由縁して、その地の神が生まれるのだらう」と述べている。この場合、能登で「須須の神」の呼び名が使われてきたことから、ミホススミの神名は「美保と須須に坐す女神」＝ミホ＋スス＋ミと考えることができる。美保においては美保の神、須須においては須須の神。それぞれの地で、岬に鎮座する海の女神として生まれたミホ

の神、スス（ツツ）の神が、出雲と高志の往来・交流の中で統合されたのが、ミホススミだと捉えると、よりしっくりくる。

美保関町と珠洲市は1988年3月、国引き神話とミホススミ神の縁で姉妹都市となったが、ここで言及されていたのは、互いの地形や、それがもたらす生業の共通性だった。当時の『美保関新聞』は、姉妹都市締結に向けた狙いをこう記している。「珠洲市は能登半島の最先端に位置しており、古くは出雲風土記の国引き神話にさかのぼり、美保関町と地形的にも産業文化、観光面でも非常によく類似しており、美保関町と姉妹縁組を結ぶことによって、地域の活性化を図ろうとするもの」だと（579号、1987年1月）。

また、珠洲市商工会館で行われた調印記念式典（同年3月30日）で、佐伯美保関町長も、次のように語っている。「美保関町と珠洲布は『出雲風土記』にあるように、古代神代の昔から出雲と能登は経済・文化の交流が盛んに行われていた。共に三方海に囲まれた半島地域であり、漁業、観光等についても共通の課題をかかえており、能登の先端と出雲の先端とが海上はるか手を結び合う事は意義が深い」と（『美保関新聞』579号、1988年5月）。

ともに三方を海に囲まれた天然の良港で、青潮（対馬海流）の道上にある日本海航路の要衝。人々は海と密接に関わりながら生活し、海路による交流・往来で栄えてもきた。そうした共通性のある地域に、同じような意味の地名が付き、同じような神が祭られるのは、自然の理だ。そして双方が海路で結ばれ、往来と交流が深まる中で、ミホの神、スス（ツツ）の神が一体となった女神ミホススミが誕生したとも考えられる。

4. 地域を結んで浮かび上がるミホススミ像

ミホススミが「謎の神」などと言われる原因の一つに、各地に伝わる伝承が細切れになっていることがある。そこで各地に伝わる伝承を結びつけながら、同神の実像を描き出してみたい。その際、伝承の基盤となるのは、やはり『出雲国風土記』だろう。

本来地誌である『出雲国風土記』における神話は、地名由来に関するものが多く、前後関係が掴みづらい性質はあるが、内容から大まかに前期（＝創成期）、中期（＝国づくり期）と後期（終盤＝国譲り）の三期に分けることはできる。すなわち、国土創世譚の「国引き」が最も早（古）く、国譲りが最も遅（新）しい。その間にあるのが国作りという時系列になる。

またコシの国の表記は、早い（古い）順から高志—古志—越へ変わったとされている。この表記の違いを『出雲国風土記』で見ると、国引き神話、それと連なるミホススミの神話（美保郷の地名由来）では「高志」が、国作りにかかわる古志郷の地名由来（古志人が来て堤防を作り、住み着いた）では「古志」が、そして国譲り（意宇郡母理郷）では「越」が使われている。高志—古志—越が、ほぼ出雲神話の前期・中期・後期と対応しているのだ。その流れの中で、ミホススミの位置づけを考えてみよう。

【前期＝創成期】

創世神話の国引きで、オミズヌ神が珠洲（須須）の岬を引き寄せ、美保関をつくる。それに伴い、出雲大神とヌナカワヒメが結ばれ、ミホススミが誕生する。ミホススミは、出雲の創世譚・国引き神話と連関する神で、その舞台・起点となる美保関と珠洲岬に鎮座した。

出雲から越後方面への早期の航路は、能登半

島を外周し、青潮に沿って越後の海岸に辿り着くものだったと思われる。そのコース上の能登半島外浦の沿岸（志賀町や輪島市）に出雲集落や出雲神社があり、北端部にミホススミが鎮座している。越後海岸のどこを目指すかを決める分岐点にあたる珠洲岬を、人々が古い時代から特別な地として意識していたことが、国引きやミホススミの神話を生み出したと思われる。

【中期＝国づくり】

出雲大神が各地で国作りを行い、ミホススミがそれを手伝う話が残っている。例えば、越中ではミホススミは「大己貴神の国土経営の功を助け給ひし神」（大正13年『富山県神社祭神御事歴』）とされている。また越後では、父神・大己貴神（出雲大神）と共に、ミホススミが鉦ヶ岳（糸魚川市能生）の峰に広鉦を捧げて祈り、父神が夜星山に棲む悪神を討ち、国を安らかにするのを手伝ったという（明治44年『西頸城案内』ほか）。

また、この中期から後期にかけ、出雲から越後方面への移動手手段として、中能登の邑知瀉地溝帯ルートを発見・開拓したと考えられる。『出雲国風土記』は意宇郡母理郷の条で、天の下造らしし大神（オオナムチ）が「越の八口を平け賜ひて還り」云々と記す。能登にはそれと対応するように平国祭がある。毎年3月後半の6日間、オオナムチが羽咋の気多大社から、その元宮と伝えられる七尾の気多本宮まで、邑知瀉地溝帯沿いを一往復する神事だ。途上、各地の神社等へ立ち寄るその総行程は300kmに及ぶという。

風土記にいう「越の八口」がどこか、いまだ定説はないが、加藤義成『出雲国風土記参究』は「八口の原義は谷口、即ち谷の入口」の意だという。窪地＝凹地状の邑知瀉地溝帯の入り口

を海上から見れば、まさに「八口」だ。私は現地を見た地形や平国祭などから八口＝凹地で、かつて海峡だった邑知瀉地溝帯とみるのが妥当だと考えている。

羽咋と七尾を結んで能登半島を横断する邑知（瀉）地溝帯は、JR七尾線も走る中能登の幹線地帯だが、洪積世の頃は海峡だった。陸地になった後、その平坦な台地に亀裂が生じ、南側の石動山断層と北側の眉丈山断層が逆ハの字型に持ち上がって真ん中が相対的に低下し、地溝帯となった。珍しい逆断層地溝だと、青木賢人金沢大学准教授（地理学）はいう。

その地溝帯の西部に、縄文時代の海進で、断層に沿って半島をフの字形に大きく抉る巨大な入江ができた。その後、弥生時代にかけて南から延びてきた砂洲（海岸砂丘）が、入江の口と南部を覆って邑知瀉ができる。この瀉湖入り口の海岸段丘上で祭られ始めたのが、今の気多大社だ。その周辺にある縄文前期～室町時代の大規模な寺家遺跡では、古代の祭祀に使われた様々な遺物も出土しており、同社の創始の古さがかがえる。

近世、邑知瀉の最奥部、金丸村には外海へ出て金沢の湊へ向かう御用船の波止場があった。当時の邑知瀉は水深もあり、大型の船も航行できたという（『金丸村史』）。その金丸から七尾までは約16km。外海から船のまま邑知瀉へ入って金丸まで進めば、あとは徒歩でも、半日で七尾湾に抜けられるのだ。

出雲方面から海を渡り、越後を目指した人たちは当初、南北100kmに及ぶ能登半島の西岸＝外浦に直面し、迂回＝外周する航路をとったとみられる。だが邑知瀉に入って地溝帯を抜ければ、はるかに短距離で、しかも外海の航海より安全に、内浦へ出て越中・越後方面へ向かえる。

出雲大神の「越の八口」平定譚は、それに気づいた出雲人たちが、越（高志）人と共に、水陸でつなぐ邑知瀉地溝帯ルートを切り開き、おさえた事績を物語る神話ではないか。それが邑知瀉（凹地＝谷口）の入口に気多大社が鎮座し、邑知瀉地溝帯沿いに、出雲大神が現地の女神との間にもうけた御子神たちが鎮座する所以ともみられるのだ。

例えば、白比古神社（鹿島郡中能登町良川）に鎮座するシラヒコは、昔国作りのため当地へ来た出雲大神が、在地の美しい乙女と結ばれて生まれた御子で、水を引いて荒野を開拓し、上田や窪地を作り、大いに庶民の生計の途を開いたと伝えられている。奈鹿曾姫神社（羽咋市下曾祢町）のナカソヒメも、出雲大神が現地でもうけた御子と伝わる。出雲大神が当地で賊を討っていた時、御子のナカソヒメとその兄・奈鹿曾彦命を、谷川から舟に乗せ、奈鹿曾川に下したという逸話もある。これらの社は、いずれも平国祭のルート上にある。

こうして見てくると、ミホススミは、能登半島における出雲大神と現地（高志）の女神たちの間に生れた御子神たちの中で一番早い、長女神的存在であることが分かるだろう。能登では平国祭が始まる時、巡行する気多神（＝出雲大神）の留守番をするため、珠洲の神（ミホススミ）がアイの風によって気多本宮（七尾）にやってくる、との伝承がある（西山郷史・元加能民俗の会副会長より）。能登における出雲大神の御子神たちの中で、長女ゆえの信頼をうかがわせる。

【後期＝国譲り】

越の八口＝邑知瀉地溝帯ルートを開拓し、治めた出雲大神は帰路、出雲国の東部国境の長江（ながえ）山に立ち寄り、突然「国譲り」を表明する。た

だし『古事記』や『日本書紀』とは異なり、自分が作り、治めてきた国を天つ神の子孫に譲ると表明する一方、出雲の国だけは自分が鎮座する国として、青垣山を巡らせて治め続けると宣言している（『出雲国風土記』意宇郡母理郷）。この段にミホスミは登場しない。『古事記』や『日本書紀』の国譲り譚にも現れない。母神のいる越で、引き続き、国作りをしていたのだろうか。

5. プロジェクトで可視化した女神

珠洲市役所刊『珠洲のれきし』（2004年）は、ミホスミ神は「まさに古代日本海交通のシンボル」であり、「珠洲市と美保関町は昭和63（1988）年、姉妹都市の関係をつ結んだが、この両地を結びつけたのは、他ならぬこのミホスミの神であった」と記している。その後、松江市との市町村合併（2005年3月）で、美保関町と珠洲市の姉妹都市関係は松江市が引き継いだ。が、せっかくミホスミの縁で再び結ばれた両地域の交流が、今一つ活発でなくなったのは残念である。

そうした思いもあり、2021年、筆者を含む発起人3人で「ミホスミに光を！プロジェクト」を呼びかけ、ほぼ月1回のペースで、列島各地をつないだミーティングを行った。地域バランスなどを考え、参加者を15人ほどに限定してスタートしたが、徐々に増えて1年後には30人ほどになった。ミホスミの縁でつながる出雲・高志・信濃に跨る地域間の連携で、地域振興を図っていこうという呼びかけに賛同した人々の集まりだ。宮司・神職、氏子代表、郷土史家、地元企業家、観光協会スタッフ、IT企業家、商品企画のプロ、画家、弁護士、勾玉製

作者や学芸員、大学教員など実に多彩な顔触れで、月1回ズーム（オンライン）会議を開いた。

年齢層では30～40代が多かったが、20代～80代まで幅広く、女性が4割ほどを占めてジェンダーバランスも比較的よかった。これは呼びかけ人の1人で、多彩な活動を展開している河野美知さん（元山陰中央テレビアナウンサー、現俵ちいきおこし代表取締役ほか）が、仲間と立ち上げた神社ガールズ研究会＝社☆ガールの有力メンバーたちを、引き入れて下さったお陰である。社☆ガールは松江市美保関町に活動拠点を構え、出雲神話や『古事記』『出雲国風土記』にまつわる神社を巡り、調査をしたり、地域の魅力を発信してきた団体だ。

その社☆ガールが2019年6月、美保関で開いた講演会「出雲を原郷とする人たち—ミホスミ、美保関と越の縁」に筆者が招かれた時から、ミホスミの縁で繋がる地域をつ結んだ交流の構想は始まった。それが具体化するきっかけは、2020年12月、NST（新潟総合テレビ）特番「悠かなる越の国へ」だった。その現地ロケで、ヌナカワヒメをライフワークにしている上越の日本画家・川崎日香湊さんと筆者の二人が、珠洲市の須須神社奥宮を訪れ、同社の氏子総代と交流し、ミホスミを介した出雲—能登—越後のラインがつながったのである。

ミホスミが鎮座する美保関（出雲）、珠洲（能登）、氷見（越中）など当地の人々は、欠くべからざるメンバーだった。特に本務社でミホスミを主祭神として祭る御穂須々美神社（長野県上田市）の甲田圭吾宮司と越智神社（同県中野市）の望月巖穂宮司が加わり、ご意見番的な役割を果たして下さったのは有難かった。

ミーティングの初回「みんなで語ろう会」（2021年4月）では、まずプロジェクトの呼び

かけ人と川崎日香渥さん、^{きだひで}定秀陽介さん（美保館オーナー、美保神社氏子、美保関在住）、野上徹さん（ランプの宿総務企画部長、珠洲神社奥宮氏子、珠洲市在住）が、ミホススミや出雲と越の海を介した交流、プロジェクトへの思いなどを語った。美保関で古くから廻船問屋を営んできた定秀家46代目の定秀陽介さんは、国登録文化財の美保館（本館）のほか、近隣の古民家のリノベーションなどを手掛け、美保関の観光協会長も務めている。いっぽう珠洲の野上徹さんが勤めるランプの宿も、廻船業を営む刀禰^{とね}家が天正7（1579）年に創業した老舗だ。古くから日本海域で廻船業を営んできた両家は、昔どこかで接していたかもしれない。そんな思いを交わしながら、二つの岬の縁を結び直す第一歩を踏み出すことができた。

後半のフリートークでは、地域を知ってワクワクできるようなプロジェクトになれば、とか出雲と高志（越）の双方のふるりの価値を見出したい、といった様々な思いを、参加者たちが語り合った。当面、学習会と交流会を行いながら、企画を考えていくことになったが、第3回目のミーティング（2021年7月）で、須須神社奥宮の氏子総代から、画家のメンバーにミホススミを描いて、見える形にしてほしいとの依頼があった。プロジェクトでは、それから半年以上かけ、学習会や話し合いを重ねながら、メンバー皆が納得できるミホススミ像をつくり上げた。合意したミホススミ像を簡条書きすると、以下ようになる。

【年齢（見た目年齢）】

- ・出雲大神（大国主大神）とヌナカワヒメの御子神なので、二神より（親子ほど）若い。
- ・出雲（系）神話での登場時期は早い（前期～中期）から、後期に登場するタケミナカタよ

り年上＝姉神である。

- ・ミホススミには幼少期の伝承はなく、伝承は主として父神の国作りの手伝いだから、国づくりの手伝いができるような年齢。
- ・ミホススミには御子神がないから、母親の年齢にはなっていない。

【顔のイメージ、身体的特徴、性格など】

- ・父神の国作りを手伝う伝承が複数あるので、父親の仕事を手伝う、しっかり者。高志（越）の御子神の中では長女神で、まじめ。
- ・美保関と珠洲岬に鎮座し、海を往来しているから、スマートで軽やか（に海をわたる）、健康・元気で、おおらか。

あわせて、簡潔で親しみやすいプロフィールも、話し合いながら作った。それらを2022年3月、インターネット上の「ミホススミに光を！ブログ」で公開し、同年4月の須須神社奥宮の春祭りで、氏子の皆さんに披露することができた（図7）。その後、越智神社の望月宮司からも「氏子たちは長らく、自分たちの神社の神様が、どこの出身かもよく分からず、寂しさがあったので、今回のプロジェクトで知り得たことや、ミホススミ命像を大変喜んでおります」とのお言葉をいただいた。

「ミホススミに光を！プロジェクト」では、2021年度の1年間、ミホススミに縁の各地を紹介したりする学習会や、前記のイメージ像づくりの他、ミホススミに関する商品開発や（オンライン）ツアー、絵本の制作や全国みほさん企画など、様々な企画を出し合い、話し合った。2022年度からは、1年かけて作り上げたネットワークを継続しながら、必要な時に呼びかけ、集まるオンデマンド型の方式に改め、交流を続けていくことにしている。

図7 ミホススミのイメージ像とプロフィール

<p>【愛称】 ミホちゃん</p> <p>【漢字表記】 御穂須須美・三穂須須美 美穂須須美</p> <p>【性別】 女神</p> <p>【家族】 お父さん=天の下造らしし大神 (大国主大神、国づくりの神・海を渡り来る神)</p> <p>お母さん=ヌナカワヒメ (高志国=北陸のヒスイの女神、姫川の水神)</p> <p>お爺さん・お婆さん=オキツクシイ、ヘツクシイ (海の沖の神、岸辺の神)</p> <p>弟=タケミナカタ (諏訪湖の水神)</p> <p>* 異母弟妹はたくさん</p> <p>* 出雲国と高志国 (北陸) の縁を象徴する女神</p> <p>【お家 (本宮)】</p> <p>美保関地主社 (島根県松江市) と須須神社奥宮 (石川県珠洲市)</p> <p>* 国引き神話でつながる出雲の美保関と高志 (北陸) の珠洲岬に鎮座</p> <p>* 大湊神社 (福井県坂井市)、須須能神社 (富山県氷見市)、清水神社 (新潟県出雲崎町)、新穂神社 (新潟県長岡市)、越智神社 (長野県中野市)、御穂須々美神社 (長野県上田市)、時沢神社 (群馬県前橋市) などにも鎮座</p> <p>【得意なこと (ご神徳)】</p> <p>航海安全・豊漁の海神、豊穡の水神、子孫繁栄の産土神</p> <p>* 美保 (関) と須須 (珠洲) を結ぶ海の水神、美しい稲穂の実りを進める神</p> <p>【性格】 お父さんの仕事 (国づくり) を手伝うしっかりものの長女、海を往き来する大らかな性格</p> <p>【記念日 (例祭)】 11月28日 (美保関地主社祭)、9月22日 (狼煙町秋季例祭)</p> <p>【宝物】 父親ゆづりの出雲石=碧玉の勾玉と、母親ゆづりのヒスイの丸玉</p> <p>【ここだけの話】 お父さんっ子 (父神と一緒にの伝承ばかり)</p>	
---	--

注:「ミホススミに光を!プロジェクト」ブログ (mihosusumi.blog.jp) より